淀川水系流域委員会 琵琶湖部会 一般意見聴取試行の会（2003.7.19 開催） 結果概要

03.9.22　庶務作成

開催日時：2003 年 7 月 19 日（土）　13：30～17：30
テ ー マ：「これからの琵琶湖と川とダムを考える若者討論会 Ｎｏ２」
場　　所：伊香郡民会館
参加者数：委員 8 名、一般傍聴者 166 名

1　試行の会の概要

部会長の挨拶、三田村委員による本日の会の趣旨説明の後、意見発表者 6 名より、各 10 分ずつご意見をうかがい、各 5 分程度委員との質疑応答が行われた。その後、本日の発表内容や丹生ダムについて、委員、発表者、一般傍聴者の間で意見交換が行われた。

2　意見発表者からの主な意見

○伊吹 浩一氏：環境教育の義務化や自然環境保全管理等について具体的な方策を

（発表内容の概要）

湖北町には、河川改修や圃場整備等によって効率的な農業が行える水田が多くありますが、水生動物がほとんどいないため、自然が豊富だとは思えません。高時川では、夏になると取水等により瀬切れが発生します。滋賀県内の山間部には植林したきり放置されたままの真っ暗な林が目につきます。広葉樹林に覆われた森林に比べて明らかに生物が少なく、これも「自然豊か」とは呼べないものです。琵琶湖湖岸の調査では、水位調節による水位変動等で、ヨシ帯の様相が 1 ヶ月ほどですっかり変わるのを見て驚きました。これらが、人間にとって住みよい環境を作り出すために行われた結果だとは言え、生物の多様性が失われるのは当然の結果だと思います。

治水、利水だけでなく、河川や森林の生態系が維持されるような対策の検討が必要です。環境教育の義務化、自然環境保全管理等について具体的な方策を施策として考える必要があると思います。

（主な意見交換）

・高校を卒業されるまでこの地域で暮らしていたということですが、そのころ、「自然環境」という言葉を普通の暮らしの中で、例えば、家族の方が使っておられましたか。（委員）
　→そういう言葉は使っていませんでした。大学で学んで、そう言われてみると確かに、湖北町には緑は多かったけれど自然と呼べるものは少なかった、と実感したわけです。（発表者）

・「自然環境」という言葉は非常にあいまいです。「田んぼが自然かどうか」という問いも難しい。どのように思われますか。（委員）
　→様々な生き物がいる環境が自然だと思います。いつ行っても同じ生き物しかいない、いつ行っても変化のない川は、自然とは言えないと思います。自然には変化があるものだと思います。（発表者）

・伊吹氏は、湖北町の森に携わって生活できるようになれば、湖北町に戻ってきますか。例えばドイツでは、森林を単なる材としてだけではなく、エネルギーとして利用する等の経

済構造ができているのです。それと同じように、湖北町の森林で食べていけるようになれば、戻ってきますか。（委員）

→森林で食べていけるいけないではなくて、生き物が生きていけるようなところに変えていきたいとは思っていますし、いずれは戻ってきたいとは考えています。（発表者）

○杉本 剛氏：息子の代でも漁師が続けていけるような琵琶湖に

（発表内容の概要）

琵琶湖総合開発がはじまる前、多くの学識経験者が「絶対に影響はない」と言っていました。それから、たった30年間で琵琶湖の環境が大きく変わってしまいました。アユの遡上が減り、1日で3～5㎝も水位が下がって魚の卵が死滅してしまっています。それにもかかわらず、開発完了後の影響調査やモニタリングをしている様子は見受けられません。工事や開発の責任についてもはっきりしていません。我々漁師に謝ってほしいとは思いませんが、こんなにも減ってしまった魚たちに謝ってもらいたい。

ダムをつくって100年に1回の洪水に備えることも大切でしょう。どうしてもダムをつくるというなら、ダムの影響をしっかりと見極めてほしい。しかし、やはりダムはつくらずに、自然をこのまま残して、琵琶湖で息子に漁師を続けさせてやりたいと思っています。

（主な意見交換）

・琵琶湖総合開発では、減産補償がありました。確か4割減産の補償だったと思うのですが、漁業の現状からすれば、4割で済みますか。（委員）

→4割の減産ではとどまりません。かつては、フナ1kgで2000円程度だったものが、今はその3～4倍していますから。（発表者）

・1日で3～5㎝も水位が低下するということですが。（委員）

→梅雨時に水位が高くなったと思ったら、すぐに、目に見えて水が減っていきます。魚にしてみれば、卵を産んだ場所が次の日には干上がっているわけです。（発表者）

・外来魚の影響はどうでしょうか。（委員）

→若い漁師が一生懸命捕っていますから、今は外来魚が非常にたくさんいるというわけではありません。ただ、大量に捕った外来魚の中に1、2匹の在来魚も混じっていて、それをそのままにして売っていると新聞等で批判されました。しかし、それはほんのごく一部です。一生懸命外来魚を捕獲したので、ボテが増えてきています。こういう漁師の努力も見てほしいと思っています。（発表者）

○永井 正彦氏：貴重な水を生産・保水する山林の保全も丹生ダムの目的の1つ

（発表内容の概要）

丹生ダムの水源町に広がる広大な森林管理については、地元では昔からその対応に苦慮してきました。木材需要の低迷、担い手不足、過去の製紙会社による立木伐採や近年のスキー場開発などによる民間企業の山林買い付け等によって、山林管理は非常に困難な状況にあります。

地元では、「丹生ダム自然公園」という理念に保全対策を図ることで、民間企業の介入に歯止めをかけているところです。自然に何も手を加えなければ、それで保全できるという考えの委員も一部おられるようですが、自然は手を加えなければ悪化する一方です。水源町のこれからを担うものとしては、丹生ダムによる保全対策を望まざるを得ない状況なの

です。しかし、丹生ダム計画は「新たな展開の工事には着手しない」となっており、保全対策にも「待った」がかかっています。丹生ダムは治水、利水、河川環境保全のためだけではなく、貴重な水を生産・保水する山林の保全も目的の 1 つとしていることを認識頂きたいと思っています。

（主な意見交換）

・山林の保全には様々な形があると思います。岩手県の高齢化の進んだ村、例えば、沢内村や衣川村では、材として森の木は売れないので、木質バイオマスのエネルギーにしていこうということで、具体的な形作りをはじめました。自分たちの地域でつかうだけではなくて、チップやペレットにして売るための工場も出てきはじめています。何とかかつてのより良い森に近づけるための議論が、地域の皆さんの中でありますか。（委員）

→バイオマス事業については、立木伐採がダム事業に伴って出てくるので、丹生ダム関連の土捨て場の跡地を利用して進めていこうとしています。また、なんとか後世に森林を伝えていきたいという思いから、「丹生ダム自然公園」という理念で保全対策に努めようということになっています。ただ、丹生ダム建設計画が進んでいませんので、この検討もストップしている状況です。（発表者）

・山も田んぼも、地元の手が加えられて、守られてきました。その手の加え方が変わりつつあります。余呉町は山の町ですから、手を加えながら暮らしを成り立たせる足場として、山をつくっていけるのかが大事だろうと思います。委員も、自然に手を加えなければそれでよいとは思っていません。（委員）

→人があっての自然だと思っています。その保全対策としては、地元ではもう 20 数年前から、自然保護対策も含めた上でダム受け入れを承知してきた経緯があります。また、丹生ダムの安全性に関する調査委員会でも安全であると報告され、それをもとにここまで進んできました。山林の管理については、地元で直接携わったものでなければわからない部分もあることをご理解頂きたいと思っています。（発表者）

・ダムを受け入れてきた地元の方々の思いというのは承知しています。その上で、将来を考えたときに、これまでと同じようなやり方で進めて良いのか、琵琶湖の現状、子どもたちのこれから、地球的な環境問題を考えると、次の世代に引き継ぐ責任を持つ今の世代の私たちが思い切った決断もせざるを得ないと思っています。これまでの国のやり方は、ダムを受け入れなければ、地域の開発も振興もできないという施策でした。これを根本的に改めなければなりません。ダムがなくとも、森林は保全されなければなりません。ダムに頼らなくても地域が振興していけるための道筋を真剣に考える必要があると思います。（委員）

→25 年前に流域委員会があれば、余呉町も変わっていたと思いますし、ダム以外の地域振興策もあったと思います。ただ、現実的な問題として、これだけの山林を地元の手で管理していかなければなりません。明日も総出で草刈りに出ます。高齢化が 30%近い余呉町では、ダムに頼らざるを得ません。私には他に手だてが思い浮かびません。もしあれば、教えて頂きたいと思います。（発表者）

○中田 重樹氏：住環境の保障と治水効果のある河川整備を。丹生ダムは安心を与えてくれる。

（発表内容の概要）

びわ町では、河口から 10㎞ 以上天井川が続き、その両側には住宅が密集しており、いっ

たん破堤すれば壊滅的な被害が発生してしまいます。昭和50年にこの地域をおそった台風によって、漁具や船が濁水に流され、高さ6㎜の堤防天端に迫るほど水位が増したそうです。

これを思うと、現在の治水対策に強い危機感を感じます。また、びわ町の場合、河川区域内に堤外民地が存在しており、ここで栽培されている農作物等が洪水時には土砂に埋もれ、壊滅状態になってしまいますし、やなをはじめとする漁業施設への被害も甚大なものになります。

せめて安心して暮らせるような治水効果のある河川整備をお願いしたいと思います。自然環境の保全も大切ですが、それも日々の住人の安全（生命）が確保されていることが前提ではないでしょうか。丹生ダムは少なくとも今よりは生活の安心を与えてくれると信じていますし、安心で安全な暮らしなくしては住み良い住環境はあり得ないと思います。

（主な意見交換）

・地域の水防活動について教えてください。びわ町の南浜には自治会の中に水防委員や堤防委員がいて、大雨の時には見回りをするといったことをされていますか。いざというときに、どのような対応をされているのですか。（委員）

→びわ町では、水防組織は消防組織とほぼ同一です。町の水防協議会の指示を受けて、各集落の消防団員が水防班となって警戒に当たっています。平成10年に大水が出たときには、いち早く地元の水防団が応急処置にあたりました。（発表者）

・よそ者の暢気な話として聞いてください。もしダムができて、安心になれば、水防委員も堤防委員も必要ない、ということにはなりませんか。

→若い年代には、洪水に対する恐怖というのはないでしょうから、経験のある私たちが伝えていかなければならないと思っています。そうは言っても、私自身も水防訓練を行ってきましたが、正直、半信半疑でした。本当の恐怖を知っている人の意見を聴いて、後世に伝えていく必要もあると思います。（発表者）

・ドイツでたまたまライン川の氾濫に出くわしたのですが、地域の人たちは、川は氾濫するものだと言って平気な顔をしていました。ライン川の両岸は氾濫源になっているので、そもそも川の考え方が日本とは違っています。日本でも、川を広い範囲で考えていく可能性もあるのではないかと思っているのですが、どうでしょうか。（委員）

→現状の生活がありますので、土地計画から全て見直して生活をやり直す、河川を付け替えるといった発想は、今の時点では生まれてこないでしょう。（発表者）

○藤井 孝成氏：地球温暖化の影響を和らげるような治水・利水対策を

（発表内容の概要）

現在、地球規模で温暖化や気候変動が進行し、これまでになかったような出水や渇水が頻発しています。この地球温暖化が琵琶湖に与える影響は多岐にわたり、琵琶湖流域の降雨量、治水、利水、環境にどのような影響を与えるかを考えていかなければなりません。

地球温暖化が琵琶湖に与える環境変化への対策としては、まず、流出量や土砂流出量の変化に対しては森林保全による水源地の涵養が考えられます。それから、干ばつや渇水に対しては、ダムや貯水池の建設が必要になります。次に洪水に対しては、ソフト面では防災意識の向上、ハード面では貯水施設の運用改善や新規建設が対策としてあげられます。琵琶湖の水質変化に対しては、排水施設の整備による汚濁水の流出防止、水生生物による

浄化機能の強化といったものが対策として考えられます。

（主な意見交換）

・統計等を見ると、確かに降雨量は減少傾向にあるようです。しかし、今年もたくさん雨は降っていますし、実感としてはそれほどの減少傾向にあるのかなと思っています。全国的に雨が減っていると、言い切ることができるのでしょうか。（委員）

→過去 10 年間では、各地のダムで水不足や渇水が叫ばれました。年によっては人間の生活に影響を及ぼすような問題が起きています。ただ、年によってバラツキがあります。あくまでも傾向として、雨が少なくなってきているということです。（発表者）

・温暖化と少雨傾向によって、琵琶湖の水も減ってくる。何とか解決する方法はないのでしょうか。提案があればお願いします。（委員）

→まずは個人レベルでできる温暖化対策をすることが大前提だと思います。それでも、地球全体の温暖化を和らげるのは、非常に難しいので、なるだけ温暖化による影響が少なくなるように、例えば、湖の富栄養化を防ぐ対策、河川の流水量の変化が少なくなるような対策といったことが必要になってくると思います。（発表者）

○村上 悟委員：住民が自ら取り組んでいくことが、自分たちにとって一番幸せなこと

（発表内容の概要）

私の実家の前に流れていた小さな川が、危険な場所だという理由で、県の整備によってコンクリートでフタをされました。私にとっては大事な川だったのですが、私の思いを実際の施策に反映する機会がありませんでした。これと同じことが、琵琶湖についても言えると思うのです。

丹生ダムにしても、本来、ダムの水を使う下流の人たちが、丹生ダムの地元の課題を理解していたのだろうか、本来であれば、流域に住む全ての人が一緒になって考えて、共有すべき問題を一部の人が引き受けなければならなくなったことが、問題の根本にあるのだと思っています。

私たちは、利水や過疎の問題を河川管理者に任せてしまったために、そういった問題を共有できませんでした。これからは、河川管理者に、今取り組んでいる問題の中で住民にできることが何か教えてもらって、住民が自ら取り組んでいくことが自分たちにとって一番幸せなことだと思うし、ひいては、それが流域全体の環境や社会にとって大事なことだろうと思っています。

（主な意見交換）

・私たち委員は、地元の方と同じ体温で丹生ダムのことを考えることはできません。ただ、新潟県の奥三面ダムの話が映画になっています。ダム計画によって地元の人たちが移転するのですが、自分たちの歴史や文化をたどりながら、水源地に戻るという映画です。日本の各地域でダムの問題が起きています。この映画が、ダムの地元の人、ダム問題を客観的に考えている人、ダムに関心のない人が繋がる1つの手だてになるのではないか、ぜひ一緒に見てみたいと思っています。（委員）

・地域社会の自主自立の力が日本をここまで維持してきたのだと思います。私たち委員は時として無責任なことを発言しますし、地元の方と同じ体温では考えられないかもしれませんが、一緒に考えていきたい、考えさせてほしいと思っています。自然の再生は地域社会の再生です。高齢化率 30%の湖北の町に若い人たちが戻ってきて、子どもを生んで育てて、50 年、100 年と繋がっていくような地域の力をどうやってつけるのかということは、ダム以上に大切なことだと思います。（委員）

4 自由討論

「発表の内容」や「丹生ダム」について、委員、発表者、一般傍聴者の間で意見交換が行われた。

○ダムと漁業と水質と

鳥塚氏：南浜漁協の組合長をしています。南浜漁協がダムを賛成している理由について意見を述べたいと思います。昨年度、瀬切れが発生して、魚の産卵期に水が全くありませんでした。また、少ない水を農業用水としてとられてしまっています。頭首工までは水があり、用水路には水が流れているのに、それ以降の本川には水が流れていません。琵琶湖全般の河川を見ても同じような状況です。それから、琵琶湖の急激な水位変化によって、温水性魚類が減少しています。昨年度の資源量は例年の 3 分の 1 以下という極端な状況でした。このままでは、琵琶湖に漁師がいなくなるのではないかと思えるほど、非常にせっぱ詰まった状況です。できることから少しでも早く改善の手を打って頂きたいというのが、琵琶湖の漁業者の願いです。

琵琶湖の環境悪化について、琵琶湖を職場にしている私たちから意見を聴いてもらっていないという思いを持っています。一度、漁業関係者から意見を聴く機会をつくって頂きたいと思っています。

永井氏：地元においては、長年、丹生ダムについて議論されてきました。しかし、一体いつになったら、しっかりとした河川整備計画が策定されるのでしょうか。河川管理者の説明によれば、一番最初の河川整備計画では、ダムについては、今後も調査検討を続けると記載されるとのことでしたが、これはおかしいと思っています。地元では、ダム計画が延びる度に治水面でも不安が募っていく一方です。山林保全についても先ほど発表した通りです。早く、ダム計画を策定してほしいというのが私たちの要望です。

杉本氏：先ほど委員から琵琶湖総合開発の補償について質問がありましたが、確かに漁師は補償をもらいました。しかし、ほんの一時金です。一生の補償にはなりません。それから、丹生ダムの地元の町では高齢化が 30%ということですが、それは漁師も同じです。だからこそ私たちは、NPO 団体等に働きかけたりしています。行政はそういった働きかけをしているのですか。

永井氏：働きかけと言われると、正直、そのようなことはしていません。ただ、瀬切れ解消も丹生ダムの目的の 1 つです。私個人としては、ダムを活かした水質保全と漁業を考えてもらうことはできないかと思っています。地元としては、ここまでダムを進めてきたので、ダムによる環境保全を検討してもらえないかと思っています。

三田村委員：ダム問題にはさまざまな対立意見があります。河川管理者は、住民意見を河川管理に反映していくと仰っています。ぜひ、さまざまな対立する意見をお聞かせください。

西田氏：余呉町の西田です。保健所でアユの検査等の環境調査をしてきました。保健所を辞めてからも、余呉町の水質調査を中学校の生徒への指導等、琵琶湖の水質改善に関わってきました。余呉町では環境問題への意識が高く、琵琶湖の水質悪化に心を痛めており、余呉湖の深層ばっき装置等のさまざまな対策を行っています。

上流の地域も必死に水質改善に取り組んでいるということを報告して、私の意見にかえたいと思います。

杉原氏：京都市の御所の水守りをしています。皆さまは、琵琶湖周辺の治水のためにいろいろな努力をされていると思います。しかし、京都府の知事はダムをつくらないように努力されていると私は理解しており、非常に有り難いと思っています。皆さまもどうぞよろしくお願いいたします。

○滋賀県に新しくやって来る人達と一緒に考えていくためには？

茨氏：八幡市の三川合流地点の近くに住んでいる大学生です。土木を専攻しており、将来は滋賀県で仕事をしたいと思っています。滋賀県は人口増加率が日本で一番で他府県からたくさんの人が流入してきています。そういった新しく滋賀県に来られた方と、琵琶湖の自然環境や漁業に関する問題、渇水、防災といったことを一緒に考えていくためにはどうすればいいのか、議論をして頂きたいと思っています。

杉本氏：漁師の意見です。現在の琵琶湖の水質は最低だと言われていますが、まだ魚は生きています。まだ飲めます。しかし、これ以上ダムをつくって、汚れた水を琵琶湖に流していいのか。これで水がよくなるのか。なるわけがありません。それならば、NPO の人たちや地元の人たちが総出で助け合って、山林管理や水質改善に取り組んでいけばいいのではないかと思っています。こう言ってしまった以上、頼まれれば、私も余呉町まで下刈りに行かないといけないわけですが、そういったことを考えていかないといけないと思います。

寺川委員：上流の山と湖を繋ぐために、漁師である杉本さんが余呉町まで下刈りに出掛けていくことも必要になってくるんでしょうね。湖で暮らす人たちには山林の実態を見てもらう、山で暮らす人たちには湖に潜ってもらうことで、山から湖への広がりがつくれたらと思っています。茨さんも一度滋賀県に来てもらって、山や湖がどんな状況にあるのかを見て欲しいと思います。

三田村委員：先日、松岡委員からビワマスを分けてもらって学生と一緒に刺身で食べたのですが、「こんなうまい魚があったのか」と言っていました。だからこそ、琵琶湖に魚が住める環境にしていかなければならないと思います。やはり、琵琶湖に来てもらって現状を知ってもらうことが大切だと思います。

嘉田委員：交流として、淀川流域の人たちが総出で、余呉町の草刈りにでるといったことが具体的に提案できればよいなと思います。

○余呉町と丹生ダム、環境と開発

谷嶋氏：余呉町の谷嶋と申します。60 年前のことを思い出しながら、皆さんのお話を伺っていました。確かに、昔は立派な自然がありました。しかし、時間の経過とともに現在のような姿になったのです。美しい雪解け水が琵琶湖に注ぎ込んでいることも事実ですし、スキー場開発によって濁水が流れていることも事実です。余呉町の人間は、30%近い高齢化率の中で、開発と環境にどう取り組んでいけばよいのか、考えています。開発と環境と地域の活性化は非常に密接な関係にあります。流域委員会も、開発と環境の関係を地元の人間と一緒に見て欲しいと思っていま

す。私は、丹生ダムが自然環境にとって非常に効果のあるダムだと自信を持っています。一日も早くダム建設に着手して頂きたい。

三國氏：余呉町の丹生ダム対策委員会の三國と申します。川那部部会長にお尋ねしたいと思っておりましたが、途中で帰ってしまわれました。丹生ダムについて申し上げたいと思います。丹生ダムについては、用地取得も完了しています。水没住民の移転も終わりました。工事用道路もほぼ完了しており、ダム本体工事の直前です。こういう状況の中で、委員会の意見は、ダムについては「原則として建設しない」となっています。果たして、委員会はダムが中止になった後のことを考えておられるのでしょうか。自然は人の手を加えないと荒れていく一方です。ダム建設のために買収された広大な土地をどうするのか、自然環境の保全をどのように進めていくのか、委員会では議論されているのでしょうか。もし委員会が議論しようとしているのであれば、地元の私たちも真剣に議論をしていきたいと思っています。

寺川委員：私の考えでは、琵琶湖部会ではダム中止の意見がまとまりつつあると思っています。もちろん、ダムを中止した後のことも議論を進めていますし、委員からも意見が出てきています。ただ、最終的に事業計画を決定するのは近畿地方整備局です。その整備局は、特に水需要の精査確認のために時間が必要なので、今後もダムについては調査検討を続けると言っています。委員会は、ダムを中止するにしても建設するにしても、地元が被ってきた歴史的な経緯や影響、個人の思いに十分に応えていくための仕組みづくりのためにも、地元の方と膝をつき合わせて話し合っていかなければならないと思っています。

嘉田委員：寺川委員は、ダム中止で意見がまとまりつつあると発言されましたが、委員の中でも意見の幅があることを表明しておきたいと思います。私自身は、部会でダム中止の方向で意見が固まりつつあるとは思っていません。人の手を加えなければ自然は守れないというのが永井さんの意見でしたし、村上委員の意見でもありました。自然の再生と地域の再生がどのように繋がっていくのか、そこを探るためのプロセスとして、ここに来ているわけです。個人的には、ダムを止めるべきという決断はしていません。

三國氏：近畿地方整備局が整備計画をつくる等の法的な手続きについては、十分に承知しています。しかし、そういった法的なことよりも、地元で暮らす私たちは、流域委員会の議論になかなか入り込めない、琵琶湖部会と我々地元との距離があまりにも遠すぎると感じています。流域委員会の中に地元を取り込んで欲しい。我々とともに議論を進めて欲しい。そのように思っています。

酒井氏：びわ町の酒井と申します。丹生ダムは、下流の利水のためにも、琵琶湖の水位変動を改善するためにも、瀬切れ解消のためにも、水質の改善のためにも大変有効です。また、高時川は天井川であり、両岸には住宅地が密集しています。堤防はもろく、堤外民地があるため河道掘削もできません。ダム以外の河川改修で治水対策を行うことは、もはや不可能です。安心して暮らしていける町にするためにも、丹生ダム建設は地元の皆さんの念願です。琵琶湖総合開発で約束したダムを建設しない、これから 1 年も 2 年もかけて議論をするなんて全くおかしいと思っています。ぜひ、地域住民の長年の念願を叶えて頂きたい。また、治水、利水の

ためにもダムをつくって、すばらしい整備計画にしてほしいというのが地元の願いです。

渡辺氏：兵庫県から来た渡辺といいます。地元の方のご意見と委員会の意見を聴いたわけですが、ダムのような大事なことは、早急に決めるのではなく、時間をかけてじっくりと何度も議論してくださるよう、よろしくお願いします。

丹生氏：余呉町の上丹生の丹生と申します。上丹生はダムが建設されるところです。時間をかけて何度も議論してくださいとの意見が出ましたが、ダムの議論は30年も前から続いています。最初は、安全性の問題、環境の問題、水質悪化の問題等から、もちろん反対しました。何度も何度も議論を続けてきた中で、治水や利水について、有効なダムだという話を聞きながら、徐々にダムを受け入れてきました。環境についても、水田に見られるように、環境は人が係わることによって守られるものであるという考えに立ちます。今まで荒れるにまかせていた地域が、ダムによって、人にとっても動物たちにとっても、有効な環境となることを期待しています。

先ほど、滋賀県に住む人が増えているという発言がありましたが、余呉町は人が出ていく一方です。高齢化も進んでいます。若者が定着するまちづくりは、余呉町に住む者にとって切実な問題です。そのためにはどうすればいいのか、私たちはダムとの絡みの中で考えてきました。地元にとって、ダムは１つの光であり、希望なのです。今やっと、どういうまちづくりをしていくかが見えはじめているところです。そんな中で、ほとんど唐突に、委員会からダムについては「原則として建設しない」という提言が出てきました。委員の皆さんには、余呉町でどう生きていくのか、どのようにまちづくりをしていくのかと考えている私たちの立場に立って議論をしてほしいと思います。

○最後に：委員から

寺川委員：地元の方の思いを語って頂けたと思います。他人事ではなく、本当にこの地域の将来をどうしていくのか、そういう思いを持って、委員として真剣に考えていきたいと思っています。

長い目で見たときには、委員会と地元の方々とは、それほど懸け離れているとは思っていません。本当によい滋賀県にしていくためにどうすればいいのか、住みよい町、住み良い村にしていくためには、どうすればいいのか。私たちは同じことを考えています。30年間もかけてダムを受け入れてきた経緯を思えば、そう簡単にダムを止めることはできないわけですが、将来、もう少し真剣に見直しておくべきだったということにならないように、話し合いの場を持っていく必要があると思います。

嘉田委員：私は滋賀県が大好きです。だから、もっと良いところになってほしいという思いで、これまでやってきました。決して他人事ではなく、自分の問題として、この地域がどのように次の世代に繋がっていけるのか。当事者である皆さんと一緒に考えていきたいという熱い思いを持っています。今日がその第一歩になればと思っています。良いチャンスをありがとうございました。

藤井委員：ここに来て、皆さんのお話を伺えて、本当に良かったと思っています。決して他人事だと思っていないから、ここに来ました。
この地域が再生するためには、自立できなければなりません。私は国のバイオマスのエネルギーチームに入っているのですが、最大のテーマは、農業の活性化と農村漁村の活性化です。この地域で食べていける仕組みを考えながら、丹生ダム問題に関わっていきたいと思っています。

倉田委員：琵琶湖には、手ですくうことができるほどの魚がいました。川をコンクリートで固めたこととダムが大きな原因によって、漁獲量は激減してしまいました。今後も、これまでと同じ流れを踏襲しては、絶対に駄目です。漁業が全くできなくなってしまいます。ダムは本当に慎重に考えなくてはならないのです。どういう形で、地元の皆さんと協力しあい、話し合っていけるのか。簡単にはいかないと思います。やはり十分に時間をかけて検討していく必要があると思っています。

村上委員：若者が住んでいける町をどうやってつくっていけばよいのか。地元の方も委員会も同じ思いでいることが確認できて良かったと思います。インフラが整備されているから、ということではないと思います。この地域で食べていける、この地域で仕事を持って生きているという誇りが持てるかどうかだと思います。他人に与えてもらった環境の中で生きているだけでは誇りは持てません。自分の手足で、いろんな人と力を合わせながら生きているという実感が必要だと思います。ここで仕事ができなければ駄目なのです。
先ほど、「ダムは１つの光であり、希望なのです」と発言されていましたが、私は、やはり、人にこそ光があると思います。

松岡委員：今日、お話しを聞いていて、誰もこの地域を悪くしようなんて考えていないと思いました。みんな、一生懸命良くしようと考えています。できるだけ、失敗のないように、間違いのないように、いろいろな立場から考えていく必要があると思いました。

三田村委員：杉本さんのお話を伺って、琵琶湖総合開発の失策の部分の責任の取り方について、考えました。学識経験者が責任をとらなかったとおっしゃりました。私たち流域委員会も今後意見を言っていきます。私たちの意見が整備計画に反映されたときの責任の取りよう、それを投げかけられたのだと思います。もちろん、住民の皆さんも将来の自然や環境について責任を持って行かざるを得ない。そういう時代が来たのだと思います。自分自身の生き方を見直す作業からはじめるのが、本当の河川管理なのだと思いました。
本日参加してくださった皆さん、本当にありがとうございました。

以上